

阿波の名医 ～ 大久保 新 也 ～

青藍会広報 板 東 浩

今回の阿波の名医は、徳島における防蚊事業を展開し、徳島市医師会会長を30年間務められた大久保新也先生である（図1）。氏は研究や臨床、医政の各領域においてさまざまな業績を残された。

大久保新也氏は大正9（1920）年、大久保九平氏の長男として仙台で出生。東京医学専門学校を昭和18（1943）年に卒業し、東京大学立地科学研究所や東京大学医学部細菌学教室で、昭和28（1953）年から国立東京第一病院内科で勤務された。昭和31（1956）年から徳島の大久保病院副院長、昭和35（1960）年から徳島大学医学部非常勤講師（細菌学）を



図1

担当し、昭和48（1973）年に大久保病院院長に就任した。



図2

出して分与し、国際貢献に寄与した。さらに、全国で初めて昆虫幼若ホルモンの有効性を徳島市の野外実験で立証し、併せて公害や副作用、有害事象もないと確認できたのである。タップミノーと昆虫幼若ホルモンの併用により、蚊の撲滅に大きな有用性を証明し、日本脳炎の発生予防に大きな仕事を成し遂げた。

防蚊活動に対して、日本医師会は、昭和59（1984）年に日本医師会最高優功賞を氏に授与した。表彰状には「蚊を駆除することを目的に天敵魚カダヤシを放流して実験を行い長期間大なる成果を収めその効果が確認され現在日本の約130自治体で使用され日本脳炎の発生予防に大なる寄与」、「その他小児喘息等に関係の深い衛生害虫の駆除研究にも努め地域社会の衛生の向上と日本脳炎の絶滅に多大な貢献」などの記述がみられる。

大久保氏は防蚊対策研究所を昭和44（1969）年に市医師会館内に設置し、市内の蚊を減らすためタップミノー（和名蚊だやし、舶来メダカ）を東京より移入。翌年から毎年夏季の繁殖期には、関東以西の22府県下に延べ126回11万匹を移出した（図2）。そのため、徳島市など多くの都市で蚊の発生が激減したのである。

また、昭和56（1981）年5月には、中華医学会の招聘により、北京や無錫、上海で、日本脳炎と蚊の講演を担当。タップミノー1000匹を同時に輸



図3

昭和61（1986）年には藍綬褒章を（図3）、平成3（1991）年にはさらに勲四等瑞宝章を受

章された（図4）。大久保氏の研究・臨床・社会活動はその当時、国内外において歴史的な功績を果たしたといえよう。

医政の領域でも、功業がみられる。当時、医師会内には様々な人間関係の問題や軋轢がみられた。しかし、氏の温厚篤実な人柄によって会員間の融和と協調が図られ、戦後に衰えていた医師会が復興し、活動が展開したのである。

防蚊に関しては、国立予防研究所長専門家を招聘し、徳島県獣医師会に働きかけ県下養豚場の豚に日本脳



図5

炎の生ワクチンを接種。市内各所に電撃殺虫機を設置して防除を行い、徳島県民の保険衛生を行政とも協調しながら大きく向上させた。

また、徳島市医師会館の改築に着手し、准看護婦不足の解消のため、県と文部省に陳情し、徳島県立城東高等学校内町分校として無償使用や講師を派遣し、看護婦および准看護婦養成に尽力。さらに、当時、早い時期に病診連携を提唱し、徳島市民病院と協定を結び、開放ベッド29床を確保した。その結果、開業医が患者を病院に送った後にも共同診療ができる道を開き、開業医の生涯教育実習に関わる施策も確立したといえよう。

四国四県の県庁所在地の医師会相互の交流を計るため、昭和37（1962）年四国四市医師会長会議なども大久保氏が提唱した。第1回四国四市医師会長会議を主催し、その後継続しており、各医師会の情報交換につとめ、地域医療の向上につながってきている。



図7

文化面では、芸術や音楽を愛する新也氏は数千枚のLPレコードを所有し、優れた歌手でもあった。この特技により、いろいろな活動や新しい試みが円滑に進んだことは間違いない。スポーツでは学生時代からラグビーを愛し、貴重な写真が残されている（図5）。高齢になっても赤いユニフォームを身に纏い、ラグビーボールを小脇に抱えて走り回ること。いつまでも何事に対しても情熱的に取り組まれていた。

平成16（2004）年、大久保新也氏が逝去した際には、当時の内閣総理大臣小泉純一郎から正六位に叙せられた（図6）。現在、大久保病院は、九平氏から新也氏そして明彦氏へと歴史がつながっており、地域医療に貢献されている（図7）。

（徳島大学医学部同窓会 青藍会会報90号（2017.12），73～74ページ）



図4



図6